

## 研究機関で雇用する特別研究員-PD等の育成方針

本研究所には141年という長い歴史があるが、中でも最も知られている顕著な業績は、卒後2年目の若い病理学徒を招いて、既知の化学構造をもつ化合物により小動物の内臓にがんを作り実験病理学を世界に先駆けて実践したというものである(吉田富三、佐々木隆興:化学物質(アゾ色素)の経口投与によるラット肝癌発生の実験的研究 第26回帝国学士院恩賜賞受賞)。現在でも、理念的には特別研究員-PDの育成を通して、まさに「21世紀の吉田富三」を育てたいと考えている。そして研究所のこのような過去の人物にも観るように、研究の傑出性ばかりではなく、特定の分野において本邦あるいは世界を代表するような指導者の育成を目指すものである。独創的な分野を率いる本研究所の部長(研究所PI、研究内容は時事刻々のホームページ参照:<http://www.sasaki-institute.org/>)と議論をしながら、自立して巣立ってだけでなく、当該分野の中心的人物になるべく種々の面での涵養に勤しんでもらいたいと願っている。

本研究所は東京都区中央部の御茶ノ水という圧倒的な地理的有利さがあり、これによって本研究所に所属する研究者は多くの他機関研究者との間に相互作用が起こりうる環境にある。しかもこれは人的関係にとどまらず、情報や物理的(大型機器、最先端の計測・情報技術なども含む)連携にも及ぶであろう。さらに、生物学的・基礎医学的研究がヒトにとって実際にどんな意味があるのか、臨床ではどのような意義があるのか、ということは現在の医学研究において常に問われるところであるが、この点でも、同財団に併設する附属杏雲堂病院とも強力な連携を行うことが可能で、本研究所の大きな特徴ともなっている。IRB等の倫理体制の整備はもちろん、すでにバイオバンクが存在し稼働しており、translationalな展開が容易に行われる環境にある。物理的な規模は小さな研究所であるが、Klein aber Mein; 小さくても独立自尊であれ(佐々木隆興)という精神を堅持し、先人のidealismとrealismを念頭に卓越を目指して運営していることは強調したい。

海外での学会等で発表の支援をさらに強化し産学連携なども視野に入れることで、自由闊達な活動を行うことのできる若者を受け入れたいと考えている。これに加えて、本研究所ではこれまでも無アルブミンラットの発見や糖鎖研究など複数の女性研究者が顕著な業績をあげてきた歴史がある。女性研究者への今後の期待も大いに持っている。また、小さいながらも研究所の建屋には看護師や研究者が利用可能な寮なども整備されている。これらにより柔軟な勤務体制が可能であると考えている。